

地元学の実践について(第2回 講義 第3回 実践 第4回 発表)
報告者：嶋田准也(石川県能美市)

事前課題

事前課題として、「出会った人シート」「一代記」を作成してくる課題がありました。出会った人シートでは、「今まで大切にしてきたこと」「ここ(地元)を一言でいうと？」というような、なかなか誰とも会話したことがないような設問がありました。意外におしゃべりだと思っていた中年女性のほうが、「今まで考えたことがない」と考え込むこともあり、コミュニケーションの難しさを感じました。

インタビューした人から感じたのは、人のつながりを大切にしている人が多かったこと。能美市の北側には、手取川という県内一大きな川が流れています。昔は何度も反乱を繰り返す暴れ川であり、その度に復興を村全体でやり、助け合いながら生きてきたと聞きました。その中で、みんなで助け合い、みんなでやる精神を「川筋根性」といいます。そういったものがこの地域に住む人の底にあるのかとあらためて思いました。

地元学の実践・発表

地元学の実践では、能美の里山にまつわる、生活に役立つ知恵や昔から伝わる伝承を集めました。これは、秋のイベント時のチラシやリーフレットに入れ、里山の暮らしを外の人に少しでもイメージしてもらおうと思い製作しました。製作中に思ったことは、生活の知恵的なものは、現場で話さないと出てこない、そして、季節ごとにも違うなと思いました。これは今後回数を重ねないといけないと感じました。

また、想定していなかった人の情報も入ってきて、おばあちゃんを取材したところ、80過ぎたおばあちゃんが化粧をして待っていました。コネ鉢作りの名人のおじいちゃんもアポなしにもかかわらず、2時間ほど話し込みました。みんな、話したいのだと思いました。話しているとき笑顔なのが印象的で、一代記まではいなくても、住んでいる人をもっと焦点をあてても面白くなると感じました。地域の元気は人がつくるのですから。

発表は、5分という短い時間でのものでしたが、自分の成果物のできたことばかり言い、周りの人にアイデアをもらおうという視点でもっとプレゼンをすればよかったと反省しました。また、他の絵地図を見ると、絵地図をつくる意味が何となく感じました。全体を俯瞰し、文字だけでは見えてこなかったものが見えてくるのを感じました。

まとめ

「あるもの活かし」「あるもの探し」というものは、地元学という言葉が知らなくても、集落の方と話し合いという形でこれまでも多少やってきたことである。しかしその多くは机上の話し合いであり、今回の地元学のように実際に地域に入り込んで学んでいくということをしてこなかったな、と思いました。その地域に実際に行き、道や川や山や空気、街並み自然、草木などを五感で感じることでわかることがあります。また、今回の経験として、地域に入って人の話を聞くということが、どういうことかも入り口をのぞいたような気がしました。水俣調査でお話を聞かせていただいた、吉本先生をはじめ、水俣市職員の富吉さんや松木さんの言葉から感じる、市民の方との信頼感も地元学の繰り返しを実践してきたからこそ、と思いました。

吉本先生は、地元学の発表の最後に、「地元学、あるもの探しは物知り学ではない。調べたものをどうやって、何に役立てるのか。と考えるのではない。逆。役立てるために調べるのだ。」とお話しされ、ハッとしました。仮説思考的というか、その先を見据えて物事を見ているのだな、と。

レポートで振り返りながら思ったことは、地元学を分かったとか理解したということは言えないが、これから先実践して、体感しないと、先生の難解な言葉はわからないだろうということと、実践をいかに地元の人を巻き込んで、現場で行っていくかということのをこれから意識し、地元の人が自分の地域に誇りを持ち生活できるよう、お手伝いをしていきたいと思う。